ベンガルにおける部族とカーストをめぐって：一つの歴史的試論

谷口　晉吉

はじめに
1.　ベンガル州における諸社会集団の分布の地域的特徴
2.　仮説の設定
3.　部族とカーストをめぐる考察：仮説の実証に向けて
4.　部族社会の変容－ベンガルのバラモン教的再編成
5.　部族・カーストの分布と地域類型論
まとめ

はじめに

本論文は、ベンガルにおける部族とカーストの関連をめぐって、歴史的な大きな見通しを得るための問題点の提示と整理の試みである。従来、インド史研究者はカーストを、イスラム支配開始以前のインド社会の根底を成す社会制度として把握し、それをキーワードとしてインド社会を理解しようとしてきた。言葉を代えるなら、カースト制度がインド社会の a priori な前提とされてきたといってよいだろう。

だが、ベンガル地方北部のヒマラヤ山麓に接する辺境県を研究対象としてきた筆者には、史資料から読みとることのできる現地社会のあり様には、カースト制度という枠組みでは把握しきれない重要な側面があると感じられ、このような通説に対して久しく違和感を抱いてきた。

1872 年の全国的な予備調査[1]に始まるインド人口調査（センサス）は、1881 年以降、10 年間隔で途切れることなく実施され、膨大なデータが蓄積されてきた。ベンガル州に関する 1872 年から 1941 年までの 8 回のセンサスについて、県（ジェラ）単位の分析から、更にその下の警察区（タナ）にまで考察を深めると、辺境地帯だけではなく、ベンガル州の中心をなす平野部においても、諸カーストの分布に明瞭な偏りがあることが明らかになった[2]。特に、ベンガル州の最大規模のカーストの多くにおいて、この様な偏りが検出できる。これは、これまでのカースト論では説明できない現象であり、この分布の偏りを説明することが、ベンガル社会の歴史的成り立ちを解明する上で一つの重要な課題となる。また、この分布の偏りは、ベンガル州の地域類型論を構想する上でも、重要な指標となる。

本論文では、このようなカースト分布の偏りの原因を考察するにあたって、多くのカースト

は部族（tribe）[3] を母体とするという仮説を立てる。ベンガル州の辺境地帯においては、部族の解体の中から複数のカーストが生成する過程を実証的に示すことはそれほど困難ではなく、すでに幾つかのすぐれた先行業績 [4] がある。だがベンガル平野部においては、たとえこの仮説が正鵠を得ているとしても、それを証明することは著しく困難である。この困難の原因が那辺にあるかについては、本文において触れたい。

本論文は、この仮説が十分に説得的であるか否かを検討する一つの試みである。当然に、その作業は伝統的な歴史学の範囲には収まらず、多くの先行研究に依拠し、かつ筆者の専門をはるかに超えた学際的なアプローチを取ることとなり、行論において多くの過ちを犯しているであろう。本稿をお読み下さる方々からご教示・ご叱正を賜り、今後、さらに議論を熟成させていきたい。

このテーマを取り上げるやや私的な事情を述べることをお許し願いたい。1977 年に Calcutta（Kolkata）大学に提出した博士論文 [Taniguchi, Shinkichi 1977] の作成過程で、1773 年の Rangpur 県農民反乱に加わったある農民が「俺達は Kochwara だから、兄弟を助けなくてはならない」と言ったというある地方行政官の報告が目にとまった。博士論文にこの一節を引用したものの、ここには私が専門とする経済史的視角だけでは理解しきれない内容が含まれており、この一言をどう理解したらよいのか、ずっと心に残ってきた。これがきっかけとなって、ベンガル地方北部からアッサム地方にかけて広く展開する Koch 族に関心を抱き、また、ベンガル地方の多様な地域類型を強く意識するようになり、本稿のテーマにとつながった次第である。

1　ベンガル州における諸社会集団の分布の地域的特徴

本論文で用いる社会集団に対応する原語はジャーティ（jati）である。ジャーティをカーストと同義であるとする通説とは異なって、ベンガルではこれはカーストのみならず、部族（tribe）、さらには、ムスリム諸集団などにも広く用いられる [5]。

1872 年予備センサスは、ベンガル州についてヒンドゥ 128 ジャーティ（その他とされた 15 を含めて）、ムスリム 6 ジャーティをあげ、1901 年センサスは、ヒンドゥ 158 ジャーティ、ムスリム 27 ジャーティをあげる。このように多数の社会集団を一挙に扱うことは困難であるので、本稿では 1872 年予備センサス [Beverley, H. 1872] で 20 万人以上の人口を有した 22 ジャーティについて各県ごとの構成比（百分率表示）を示す表 1 を作成した。そして、その中から、Kaibarta（Chasa を含む）、Namasudra（Chandala）、Rajbamsi（Koch、Mech、Paliya などを含む）、Brahman、Kayastha、Bagdi、Sadgop などの大規模集団の分布に注目し、その分布状況をプロットして地図 1~3 を作った。この地図は、1872 年センサス・データにより、各県における各ジャーティの構成比率を降順に並べた表 3 に基づいて、その比率が州平均を上回る諸県について縦ま

たは横の線を引いたものである[6)]。

これとは別に、各県のカースト分布を示す 2 枚の表を用意した。これらは、1872 年センサス・データにより県人口に対する各集団群の比率を計算したものであり、表 2-1 は、ムスリムを含めてベンガルのジャーティを 11 のカテゴリーに再分類し、各県における分布の比率を示し、表 2-2 は、その内のムスリム人口を省略して、非ムスリム人口（ヒンドゥ＋部族＋半ヒンドゥ化部族＋その他）におけるそれぞれのカテゴリーの比率を示している。表 2-2 は、議論は省くが、住民がムスリムへ大量改宗する以前の各集団の地域社会における分布状況に、きわめておおまかに近似しているとみなしうるだろう。

3 枚の図と表に与えられた諸社会集団の地域分布をみていくと、明瞭に指摘できるいくつかの特徴がある。バラモンといくつかの職能・技能集団はほぼ満遍なくベンガル各地に展開しているが、他方、僅か数県にその居住が限定される社会集団がある。後者は、ベンガルの東端（ミャンマーとの国境地帯）、北端（ヒマラヤ山麓地帯）、西端（ビハール、オリッサとの境界地帯）、南端（ベンガル湾岸の森林地帯）などの周辺部や平野部中央に位置する低湿地帯と丘陵森林地帯に多くみられる。社会集団の地域的集中傾向は、県レヴェルから地区やタナのレヴェルにまで降りると、一層顕著になることが多い [谷口晋吉　2003：31]。

ジャーティの中では、Pala 朝との激しい戦いに敗れ歴史的に早い時期にヒンドゥ社会への同化が進んだ Kaibarta と比べて、同じく大規模集団である Rajbamsi や Namasudra などは、その内部に多くの職能・技能集団を持つ。Rajbamsi についていえば、かれらが集住する北部諸県では、職能・技能カーストの分布密度がベンガル州内でもっとも薄いのだが、これは Rajbamsi の高い経済的自立性の結果であろう。彼らは通常はカーストとして扱われるが、ヒンドゥ的社会分業体制から相対的に独立した独自の生活スタイルと自給的生活基盤を 19 世紀後半まで保持していた。経済的自立性が高く規模の大きいジャーティは同一地域に重なって存在することが回避されていたと思われることを指摘しておきたい。つまり、これらのジャーティは地域的に棲み分けを行っており（地図 2~3）、大規模ジャーティの過去における領域性の存在（Rajbamsi や Bagdi による国家形成も重要）が想定される。

表 1 (1872)	Brd	Brm	Bkr	Mid	Hug	24P	Nad	Mrd	Jsr	Raj	Dnr	Mal	Jal	Drj	Rng	Bog	Pbn	Dcc	Mym	Fdr	Bkj	Tip	Syl	Cac	Noa	Ctg	HT	平均	Total population	変動係数
Kaibartha & Chasa	3.7	2.0	2.7	34.7	26.6	12.3	15.5	16.2	4.9	23.2	5.7	11.0	1.7	0.1	4.5	12.7	5.5	4.2	10.1	3.3	3.4	10.7	16.9	1.3	11.9	1.2	0.0	12.3	2064394	0.95
Chandala	2.2	0.2	0.1	1.2	2.0	3.1	5.7	3.4	30.5	11.1	1.1	0.5	1.1	0.9	4.6	6.5	14.3	24.7	16.1	37.7	37.5	16.0	16.1	10.9	7.6	0.5	0.0	9.7	1620545	1.20
Rjbsi+Koch +Mech+Paliya	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	2.8	0.3	4.6	66.2	25.3	78.6	73.2	51.8	13.4	0.9	2.0	3.4	0.9	0.1	0.3	0.0	0.2	0.0	3.6	0.0	7.1	1186945	2.01
Kayastha	3.5	1.5	2.5	5.1	3.6	5.6	5.4	2.7	10.2	3.4	0.7	1.8	0.3	0.1	1.3	4.7	10.1	13.2	13.8	13.8	14.4	14.4	11.9	4.8	12.3	22.8	0.1	6.9	1160478	0.87
Brahman	10.5	7.7	10.5	5.9	9.9	8.1	8.1	6.1	5.8	6.0	0.9	3.4	0.7	3.1	1.3	3.7	5.9	6.7	4.4	5.6	7.5	6.1	5.8	3.6	4.5	7.5	0.0	6.6	1100105	0.51
Bagdi	13.4	10.2	3.9	3.8	14.1	6.3	4.8	3.8	0.7	0.8	0.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.5	0.4	0.2	0.2	0.4	0.0	0.0	0.0	2.5	0.1	0.0	0.0	4.1	680278	1.66
Sadgop	12.1	19.9	3.8	7.9	5.9	2.6	2.4	4.6	0.8	0.1	0.3	0.6	0.2	0.0	0.0	0.5	0.1	0.1	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	635985	1.98
Goalla	6.5	3.2	8.2	2.2	6.0	6.0	12.3	6.3	2.4	3.7	0.6	5.8	0.5	1.3	0.4	3.1	3.3	2.9	2.3	0.7	0.8	1.8	1.1	2.7	0.9	0.1	0.0	3.7	625163	0.93
Sunri	1.5	3.9	2.7	0.2	0.6	0.9	1.4	2.6	3.8	3.2	1.0	1.9	0.6	1.4	1.0	5.7	8.5	8.2	4.7	6.4	3.0	7.0	3.8	1.3	3.5	0.6	0.0	2.6	430582	0.83
Jugi and Patwa	0.5	0.5	0.1	0.2	0.7	1.4	2.1	0.9	2.1	1.3	1.2	0.0	0.5	0.3	0.9	3.9	3.3	2.1	5.2	0.4	3.2	13.2	10.8	7.9	19.4	10.7	0.0	2.5	426543	1.41
Napit and Hajjam	1.7	1.4	1.6	2.1	2.1	2.5	2.9	2.4	3.3	3.1	1.7	2.5	1.4	1.3	1.7	3.3	3.0	2.3	2.6	3.1	4.6	4.3	2.7	1.7	6.2	5.2	0.0	2.5	426354	0.50
Chama and Muchi	3.5	5.5	0.7	0.4	2.2	4.7	7.8	4.8	4.8	2.3	0.5	2.0	0.2	0.3	0.5	1.6	1.5	3.1	0.8	0.9	0.5	0.8	0.2	3.5	0.2	0.3	0.0	2.4	393490	1.03
Jeliya	0.7	0.1	0.3	1.5	1.5	1.6	2.8	0.5	4.9	6.4	1.5	0.9	0.8	0.1	2.1	4.4	7.7	4.2	4.7	4.9	1.4	1.4	0.7	0.5	5.8	3.1	0.0	2.2	361917	0.92
Tanti	3.1	3.1	3.5	5.3	3.6	1.3	1.3	2.8	1.2	0.3	1.9	6.5	2.3	2.0	0.4	1.5	1.2	1.1	1.0	0.8	0.2	0.4	0.4	1.4	0.7	0.9	0.0	2.1	358689	0.88
Tiyar	0.2	0.1	0.0	0.8	2.1	3.3	1.7	1.9	0.5	0.9	2.6	5.5	0.0	0.0	17.9	4.7	0.8	1.0	1.9	0.2	0.1	0.1	0.1	0.3	0.1	0.4	0.0	2.0	331661	2.03
Teli	6.1	1.5	8.7	3.5	1.9	0.8	0.2	2.0	1.1	2.5	0.0	3.6	0.0	1.3	0.0	0.0	1.2	0.0	0.3	0.4	0.1	0.3	2.5	0.7	1.7	0.0	0.0	1.9	318390	1.37
Pod	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	16.8	0.6	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	293121	4.06
Kumhar	1.3	1.4	1.0	1.5	1.4	1.1	2.8	1.8	2.5	3.0	1.0	1.5	1.8	1.0	0.9	3.2	2.9	1.9	2.5	2.0	1.6	2.2	2.2	2.5	2.1	1.3	0.0	1.7	281758	0.43
Kamar	2.1	1.9	4.8	1.6	1.1	1.4	2.2	1.2	1.6	1.7	0.5	1.7	0.3	1.4	0.5	1.3	1.9	1.6	1.2	1.1	1.3	1.1	0.8	2.1	0.8	0.9	0.0	1.5	250285	0.62
Dhopa	0.5	0.4	0.5	1.7	1.1	2.7	0.7	0.8	0.9	0.7	0.3	1.4	0.1	0.3	0.1	0.3	0.4	1.2	1.6	1.0	3.1	3.2	3.0	2.3	7.8	3.7	0.0	1.5	244941	1.13
Dom	3.4	6.4	1.5	0.9	1.0	0.4	0.4	1.7	0.1	0.2	0.2	0.5	0.0	0.3	0.4	0.1	0.4	0.1	0.5	0.1	0.1	0.4	4.8	11.1	0.5	5.1	0.0	1.3	222899	1.71
Hari	1.8	4.0	0.5	1.1	1.6	0.4	0.6	2.1	0.1	1.4	5.3	5.7	2.6	2.3	0.8	5.7	0.4	0.3	0.2	0.1	0.0	0.1	0.5	0.4	0.2	1.6	0.0	1.2	202797	1.19
Total (%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		0.00
総数	1534395	549498	472598	1996085	1086040	1486483	740209	632872	890747	260213	670627	249771	174657	32828	787148	116782	350469	775155	766985	414076	871891	505647	758982	84441	170292	301753	62553		16743197	

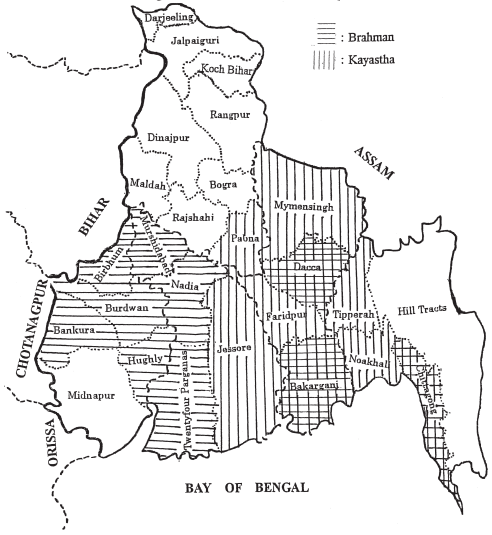
県名略語

Bkj：Bakarganj
Bnr：Bankura
Bog：Bogra
Brm：Birbhum
Brd：Burdwan
Ctg：Chittagong
Cac：Cachar
Drj：Darjeeling
Dnr：Dinajpur
Dcc：Dacca
Fdr：Faridpur
HT：Chittagong & Tipperah Hill Tracts
Hug：Hughly
Jal：Jalpaiguri
Jsr：Jessore
Mal：Maldah
Mid：Midnapur
Mrd：Murshidabad
Mym：Mymensingh
Nad：Nadia
Noa：Noakhali
Pbn：Pabna
Raj：Rajshahi
Rng：Rangpur
Syl：Sylhet
Tip：Tipperah
24P：Twentyfour Parganas

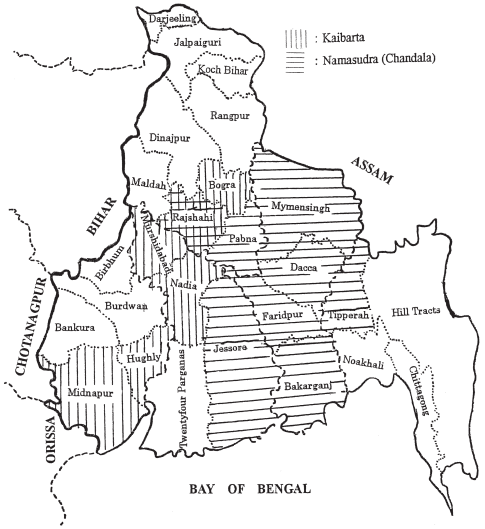
表 2-1：県総人口に対する各群の比率	Brd	Brm	Bkr	Mid	Hug	24P	Nad	Mrd	Jsr	Raj	Dnr	Mal	Jal	Drj	Rng	Bog	Pbn	Dcc	Mym	Fdr	Bkj	Tip	Syl	Cac	Noa	Ctg	HT	Total
1　上位カースト群	11.4	8.5	13.8	9.5	10.5	8.2	5.9	5.3	7.1	2.1	0.9	2.5	0.8	14.6	1.1	1.9	4.8	8.9	6.1	8.2	8.6	7.1	8.2	5.2	4.2	8.5	0.2	6.8
2　農業集団群	16.4	18.8	10.1	40.1	25.3	9.9	8.9	11.8	3.9	5.0	3.1	5.5	1.3	1.5	3.0	2.9	2.5	3.1	4.3	2.6	2.3	4.7	11.1	4.1	4.0	4.3	0.0	9.5
3　商業集団群	4.0	2.7	2.8	1.0	1.1	1.3	1.0	2.5	0.7	0.8	0.3	2.4	0.2	0.7	0.1	0.2	0.4	0.7	0.3	0.6	0.2	0.4	0.7	8.3	0.4	0.6	0.0	1.0
4　職能・技能・サービス集団群	17.9	18.2	25.1	15.7	14.7	10.6	10.0	11.2	10.1	4.0	4.9	11.3	5.7	7.3	3.6	4.1	8.8	10.8	8.4	9.0	7.4	12.6	12.9	9.7	11.3	7.4	0.1	10.4
5　牧畜集団群	4.9	2.5	7.3	1.7	4.4	3.3	5.0	3.0	1.0	0.7	0.3	2.1	0.3	0.6	0.1	0.5	1.0	1.2	0.7	0.3	0.3	0.6	0.5	1.1	0.2	0.0	0.0	1.7
6　漁業・水運業集団群	1.3	0.4	1.8	3.6	3.9	12.3	3.0	1.9	4.2	1.8	2.1	3.5	0.5	0.1	7.6	2.3	4.1	2.9	3.9	2.9	0.9	1.1	3.2	10.5	1.8	1.0	0.0	3.6
7　最底辺カースト群	5.6	7.6	1.2	2.2	4.3	4.6	5.7	4.9	15.2	2.9	3.1	3.0	2.1	1.7	2.1	2.4	4.7	11.8	5.6	15.8	13.9	5.6	7.4	6.3	1.9	0.6	0.0	6.2
8　半ヒンドゥ部族集団群	16.7	18.4	22.0	7.5	13.3	7.1	4.2	9.9	1.4	2.2	30.6	17.0	42.9	34.6	20.8	3.1	1.4	1.8	3.2	1.4	0.5	0.9	2.9	8.6	0.4	2.5	0.1	8.0
9　部族集団群	0.4	2.3	8.5	5.4	0.1	0.2	0.0	2.1	0.0	0.5	0.3	1.7	0.2	20.6	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.1	0.3	0.7	3.6	0.1	0.1	58.4	1.1
10　その他の社会集団群	4.2	4.5	4.8	7.1	2.4	3.9	1.9	2.9	1.0	2.2	1.7	5.0	1.8	9.2	1.6	1.8	2.3	2.0	1.1	1.1	0.9	2.0	2.6	4.9	1.0	4.4	39.1	2.8
11　ムスリム集団群	17.1	16.1	2.6	6.2	20.1	38.5	54.3	44.6	55.5	77.7	52.8	46.0	44.2	9.1	60.1	80.8	70.0	56.9	64.7	58.1	64.8	64.8	49.8	37.6	74.7	70.6	2.0	48.9
非ムスリム合計	82.9	83.9	97.4	93.8	79.9	61.5	45.7	55.4	44.5	22.3	47.2	54.0	55.8	90.9	39.9	19.2	30.0	43.1	35.3	41.9	35.2	35.2	50.2	62.4	25.3	29.4	98.0	51.1
県合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表 2-2：県内非ムスリム人口に対する各群の比率	Brd	Brm	Bkr	Mid	Hug	24P	Nad	Mrd	Jsr	Raj	Dnr	Mal	Jal	Drj	Rng	Bog	Pbn	Dcc	Mym	Fdr	Bkj	Tip	Syl	Cac	Noa	Ctg	HT	Total
1　上位カースト群	13.8	10.1	14.2	10.1	13.2	13.3	12.9	9.5	15.9	9.3	1.9	4.6	1.3	16.1	2.8	10.1	15.9	20.6	17.3	19.6	24.4	20.2	16.4	8.3	16.4	29.0	0.2	13.3
2　農業集団群	19.8	22.4	10.3	42.7	31.7	16.1	19.4	21.2	8.7	22.5	6.6	10.1	2.4	1.7	7.4	15.2	8.3	7.3	12.3	6.3	6.7	13.3	22.2	6.6	16.0	14.7	0.0	18.6
3　商業集団群	4.9	3.2	2.9	1.0	1.4	2.1	2.2	4.5	1.5	3.6	0.5	4.5	0.3	0.7	0.2	1.2	1.4	1.6	0.9	1.5	0.7	1.2	1.3	13.3	1.4	2.0	0.0	2.0
4　職能・技能・サービス集団群	21.6	21.6	25.8	16.7	18.4	17.2	21.9	20.2	22.7	17.8	10.4	20.9	10.2	8.0	9.0	21.2	29.3	24.9	23.8	21.4	21.1	35.6	25.7	15.5	44.5	25.0	0.1	20.4
5　牧畜集団群	5.9	3.0	7.5	1.9	5.5	5.4	11.0	5.4	2.3	3.3	0.6	4.0	0.5	0.7	0.4	2.7	3.2	2.9	2.1	0.7	0.8	1.7	1.0	1.8	0.8	0.1	0.0	3.4
6　漁業・水運業集団群	1.5	0.5	1.9	3.8	4.9	20.1	6.6	3.5	9.4	8.2	4.4	6.4	0.9	0.1	18.9	11.9	13.7	6.7	11.1	6.9	2.5	3.2	6.3	16.9	7.0	3.4	0.0	7.1
7　最底辺カースト群	6.8	9.0	1.2	2.3	5.3	7.5	12.5	8.8	34.1	13.1	6.5	5.6	3.8	1.8	5.4	12.2	15.7	27.3	15.8	37.8	39.6	15.9	14.8	10.2	7.6	2.2	0.0	12.0
8　半ヒンドゥ部族集団群	20.2	21.9	22.5	8.0	16.6	11.5	9.1	17.8	3.1	9.9	64.9	31.5	76.9	38.0	52.0	16.0	4.7	4.2	9.0	3.3	1.4	2.5	5.8	13.7	1.7	8.5	0.1	15.7
9　部族集団群	0.5	2.8	8.7	5.8	0.1	0.3	0.1	3.8	0.0	2.4	0.6	3.2	0.3	22.6	0.1	0.2	0.1	0.1	4.5	0.0	0.4	0.7	1.3	5.8	0.6	0.3	59.6	2.1
10　その他の社会集団群	5.1	5.3	4.9	7.6	3.0	6.3	4.2	5.3	2.2	9.8	3.7	9.3	3.2	10.2	4.0	9.2	7.6	4.6	3.2	2.6	2.5	5.6	5.3	7.9	3.9	14.9	39.9	5.4
11　ムスリム合計	20.6	19.1	2.6	6.6	25.2	62.7	118.8	80.7	124.8	348.1	111.9	85.1	79.3	10.0	150.4	420.1	233.8	131.8	183.1	138.7	184.3	183.9	99.4	60.3	295.1	239.9	2.1	95.5
非ムスリム合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
県合計	120.6	119.1	102.6	106.6	125.2	162.7	218.8	180.7	224.8	448.1	211.9	185.1	179.3	110.0	250.4	520.1	333.8	231.8	283.1	238.7	284.3	283.9	199.4	160.3	395.1	339.9	102.1	195.5

地図 1：　Bengal（1872）:Brahman and Kayastha（1872）



地図 2：　Bengal（1872）:Kaibarta and Namasudra(Chandala)（1872



地図 3：　Bengal（1872）:Rajbamsi, Bagdi and Sadgop（1872）

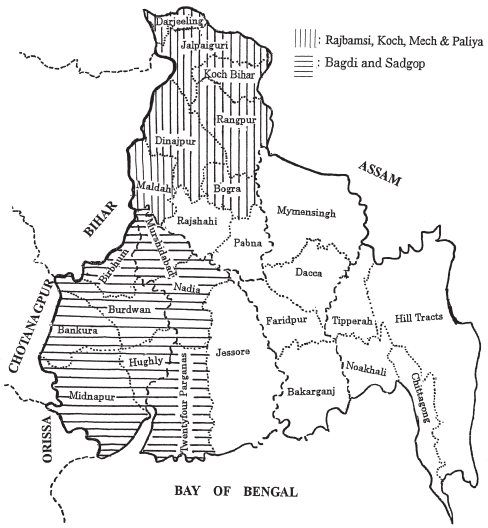


表 3（1872）																												
Kaibartha & Chasa	Mid	Hug	Raj	Syl	Mrd	Nad	Bog	平均	24P	Noa	Mal	Tip	Mym	Dnr	Pbn	Jsr	Rng	Dcc	Brd	Bkj	Fdr	Bkr	Brm	Jal	Cac	Ctg	Drj	HT
	34.67	26.58	23.23	16.93	16.20	15.52	12.70	12.33	12.28	11.90	11.04	10.65	10.14	5.71	5.49	4.94	4.50	4.17	3.70	3.37	3.30	2.68	2.02	1.70	1.32	1.22	0.07	0.00
Chandala	Fdr	Bkj	Jsr	Dcc	Syl	Mym	Tip	Pbn	Raj	Cac	平均	Noa	Bog	Nad	Rng	Mrd	24P	Brd	Hug	Mid	Jal	Dnr	Drj	Ctg	Mal	Brm	Bkr	HT
	37.73	37.48	30.46	24.66	16.13	16.07	16.05	14.30	11.05	10.93	9.68	7.60	6.55	5.68	4.59	3.44	3.10	2.17	1.99	1.24	1.13	1.10	0.89	0.53	0.49	0.16	0.11	0.00
Rjbsi+Koch+Mech+Paliya	Jal	Drj	Dnr	Rng	Mal	Bog	平均	Raj	Ctg	Mym	Mrd	Dcc	Fdr	Pbn	Jsr	Tip	Nad	Cac	Bkj	Noa	24P	Syl	Hug	Mid	Bkr	Brm	Brd	HT
	78.62	73.16	66.20	51.79	25.31	13.40	7.09	4.55	3.60	3.45	2.79	1.97	0.93	0.88	0.26	0.26	0.21	0.18	0.06	0.03	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Kayastha	Ctg	Tip	Bkj	Fdr	Mym	Dcc	Noa	Syl	Jsr	Pbn	平均	24P	Nad	Mid	Cac	Bog	Hug	Brd	Raj	Mrd	Bkr	Mal	Brm	Rng	Dnr	Jal	HT	Drj
	22.84	14.40	14.36	13.77	13.76	13.17	12.26	11.88	10.18	10.09	6.93	5.57	5.37	5.09	4.79	4.70	3.57	3.48	3.35	2.70	2.47	1.84	1.51	1.32	0.67	0.34	HT	0.13
Brahman	Brd	Bkr	Hug	Nad	24P	Brm	Ctg	Bkj	Dcc	平均	Tip	Mrd	Raj	Mid	Pbn	Jsr	Syl	Fdr	Noa	Mym	Bog	Cac	Mal	Drj	Rng	Dnr	Jal	HT
	10.48	10.47	9.90	8.11	8.08	7.70	7.51	7.48	6.66	6.57	6.13	6.12	6.02	5.95	5.86	5.84	5.83	5.63	4.49	4.36	3.65	3.65	3.41	3.05	1.35	0.93	0.73	0.02
Bagdi	Hug	Brd	Brm	24P	Nad	平均	Bkr	Mid	Mrd	Cac	Raj	Jsr	Bog	Pbn	Fdr	Mal	Dcc	Mym	Jal	Noa	Syl	Dnr	Tip	Ctg	Bkj	Rng	Drj	HT
	14.05	13.37	10.21	6.31	4.81	4.06	3.94	3.82	3.78	2.48	0.76	0.69	0.49	0.44	0.35	0.28	0.19	0.17	0.08	0.05	0.03	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00
Sadgop	Brm	Brd	Mid	Hug	Mrd	Bkr	平均	24P	Nad	Jsr	Mal	Bog	Dnr	Fdr	Jal	Raj	Dcc	Pbn	Mym	Syl	Cac	Tip	Bkj	Rng	Noa	Ctg	Drj	HT
	19.92	12.11	7.92	5.87	4.63	3.80	3.80	2.56	2.37	0.85	0.55	0.49	0.35	0.17	0.16	0.15	0.14	0.13	0.08	0.04	0.04	0.03	0.02	0.02	0.01	0.01	0.00	0.00

表 1&2 が示すようにバラモンはベンガル全域に分布するが、県によりその存在密度には明瞭な濃淡がある。とくに、北部ベンガル諸県（Dinajpur、Rangpur、Jalpaiguri）における上位カースト層の分布は極端に薄く、他方、ベンガルの西部、中部、南部に非常に濃い分布を示すいくつかの県（Bankura、Nadia、Faridpur など）がある。本稿では省くが、この集中傾向は警察区（タナ）レベルにまで降りて観察するとさらに強まる。なお、表 1 の最後の欄に示した変動係数[7]は、その数値がゼロに近いほど満遍なく分布し、その数値が高くなると分布が偏っていることを示すから、これを見ていくと、職能・機能集団の中にもベンガル全域に展開するものと、地域限定的なものとがあることが分かる。鍛冶屋（Kamar、Lohar）、大工（Sutradhar）、織工（Tanti、Jugi、Kapali）、土器作り（Kumhar）、地酒醸造・販売（Sunri、Shaha）、床屋（Napit）、洗濯人（Dhoba）、織工（Tanti）、などは全域に広くみられるが、真鍮製什器職人（Kansari）、貝製装身具作り（Sankari）、筵作り（Dom）、油搾り（Teli、Kalu）、などは分布の偏りが大きい。

北部ベンガルの住民の大半は Koch、Mech、Paliya、Rajbamsi などであり、かれらはボロ（ボド）語を母語とし、かつては王国と固有の社会・経済・文化秩序を持つ部族集団であった。北部ベンガルでは彼らこそが地域社会の主人公であり、彼らはヒンドゥ社会体系の中では不可触民の地位に置かれているが、彼らがそのような地位を唯々諾々と受け容れたとは思われない。より詳しくは後節で触れる。西部諸県（Midnapur、Burdwan、Birbhum、Bankura）における基層的ジャーティと看做し得る Bagdi についても、状況は似通っていたであろう[8]。

ベンガルのムスリム集団の 95％以上は Atraf、Ajlaf、Unspecified などと呼ばれ、その大半は農村に住み、ベンガル先住民からの改宗者であったと思われる。彼らは西方から移住し主に都市に住む Ashraf と呼ばれるエリート集団とは明確に区別され、両者の間には社会的交流は殆どないと報告されている。1872 年センサスで明らかになったように、ベンガル東部諸県では全人口の 50％を超える人々がムスリムに改宗したのであり、彼らがどのような状況の中でどのような社会層からムスリムに改宗したのかを知ることは、われわれの議論にとってきわめて重要な意味を持つ。Eaton の好著はあるが、残念ながら、これを十分説得的に解き明かすには至っていない [Eaton 1994: 112-134]。表 2-1 を検討すると、ムスリム人口比率の高い諸県では相対的に部族、半ヒンドゥ化部族の分布が薄く、これらの人々の多くがムスリムに改宗した可能性があることを指摘できる。いずれにせよ、19 世紀中ごろまでは、両宗教の住民は共通の社会基盤を持ち、それ故に民衆レヴェルにおいてヒンドゥとムスリムの双方向の改宗や、共生や習合が比較的容易に成立し得た[9]。

ここで、ベンガル北部の Rajbamsi、東ベンガル南部の Namasudra（Chandala）、西ベンガル南部の Bagdi について分布上の特徴について、簡単な考察を加えておこう。地図 3 によれば Rajbamsi の分布は、Rangpur、Dinajpur、Jalpaiguri の 3 県において顕著に高いのだが、例

えば、Dinajpur 県内の各警察区（タナ）ごとの分布をみると、明らかに県北部においてその密度が極めて高く県南では大幅に低下している。Dinajpur 県は 16 世紀前半に Rajbamsi が樹立した Koch Bihar 王国に属した部分とそうでない部分とに分かれるが、この濃淡は高い割合でこれに相関している。Namasudra は東ベンガルの南部諸県に高い濃度で存在するが、タナ毎にその分布をさらに確認すると、農業に適した開発の進んだタナには少なく、開発の遅れたタナにより多くが居住する。Risley が 19 世紀後半におこなった調査には、Namasudra の人々が、開発の波に追われるようにより未開の土地に移っていく姿が描かれている [谷口晋吉 , 2003: 24-29]。Bagdi は西部ベンガルに厚く存在する。Midnapur 県を例にとるなら、この県は、東西の対照的な２つの部分に分かれる。この東西両地域の違いは地理的なものから住民、土地制度、社会慣行にまで及び、西側は隣接するオリッサ州の Chotanagpur 高地との共通性が多く、Santal、Bhumij、Munda など山岳部族も多く住み、南東は一面の平坦で人口周密な米作地が続き Kaibarta、Sadgop などヒンドゥ農民カーストが住み、豊かな平野部ベンガルの一部をなしている。Bagdi は、かつて彼らの王国（Bagree Rajya）のあった、密林、岩場がおおく土地の痩せた県北 Garbeta 地区の３タナに集中している。これらの事例が示す分布の偏りは、県単位の分析では検出されない。

最後に、1872 年センサス・データに拠って、ベンガル州を構成する５地方（Divisions）について、それぞれの社会集団分布の地域的特徴をごく簡単にまとめておきたい [10)]。

Burdwan 地方：州西部。ヒンドゥが人口の 87% を占め、ムスリムは少ない。バラモン、農業カースト、職人、商人、サービス集団の人口が大きく、最も典型的なヒンドゥ社会構造を持つ。だが同時に、Chotanagpur という部族集住地域と境を接することから、ベンガル州で最大の部族人口をもち、半ヒンドゥ化部族も多く、彼らが農業労働者、貧農（過小農）層の最大部分を形成する。

Presidency 地方：州中央部。首都コルカタがあるが、南部海岸線には広大な密林（Sundarbans）、北部には砂の多い痩せた土壌の地帯を含む。ムスリムが人口の 48% を占める。ヒンドゥ人口では、部族民は少ないが、Sundarbans には多数の半ヒンドゥ化部族人口を抱える。漁業・水運業集団が多い。ムスリム織工（Julaha）も多い。

Rajshahi 地方：州北部。北は Himalaya 山麓に接し、東西を２大河（Ganges と Jamuna）が画する。ムスリム人口が 61% と明確な多数を占める。ヒンドゥ人口は、北部では半ヒンドゥ化部族（特に、Rajbamsi）が大半を占めるが、南部にはカースト・ヒンドゥが多い。上位ヒンドゥ層の分布は北部では極めて薄い。こうして、この地方の北部では、半ヒンドゥ化部族が社会の中心的存在であり、多くの技能集団や司祭も彼らの中で生み出されている。そこでは、焼畑はすでに 18 世紀後半には水田となり、ほとんど見られなくなったが、女性たちは家族のために布を織り、

独特の衣服を着る。大河河畔には多くの漁業・水運集団も存在する。

Dhaka 地方：州東部。ムスリム人口は 59%。部族人口は少ないが、半ヒンドゥ化部族の人口はヒンドゥ人口の 30% を占め相当に大きい。この地方の南部 3 県では、不可触民とされる Namasudra（Chandala）がヒンドゥ人口の 58~68% と極めて高い割合を占める。同時に、ベンガルで最大の Kayastha 人口と織工層を始め多くの技能集団が存在することにも注意すべきであろう。大河河岸には多くの漁業・水運業集団がいる。ちなみに、蒸気船と鉄道の進出が、伝統的な水運業を大幅に縮小させたことを、1872 年と 1901 年のセンサスの比較によって指摘できる。

Chittagong 地方：州東南部。ムスリム人口は 67% とベンガルでも最も高い比率に達する。ヒンドゥ人口中では、上位カーストの比率が 15% と高いことも特徴をなす。農業集団は多くないが、その最大部分を Kaibarta が占める。ヒンドゥ織工も多い。この地域はベンガル州で最後に開発が進んだ地域であり、その開発集団が地域の有力者層をなす。

２　仮説の設定

前節および Koch Bihar 王国の Rajbamsi（Koch、Mech、Paliya を含む）集団に関する拙稿 [Taniguchi, Shinkichi 1994: 57-92] で明らかにしたように、今日ではヒンドゥ・カーストとして受け入れられている Rajbamsi は 19 世紀後半までは部族、あるいは、半ヒンドゥ化部族であり、しかも、極めて高い割合においてベンガル州北部諸県に集中的に分布している。前節で示したベンガルのカースト分布に関する全般的考察と合わせて考えれば、Rajbamsi の事例は決して例外ではない。従って、これをより一般化して、地域的集中度の高いカーストの多くが部族的な起源をもつという仮説を立てることが可能である。

実際、Rajbamsi 以外にも、Chandala、Kaibarta、Bagdi、Sadgop など、ベンガルの最大級の人口を擁するカーストの多くが､このような分布の偏りをもっている。しかも､その大半はカースト的身分秩序において下層、最下層に位置する。ここに、ベンガル社会とベンガル史の根本に関わる重要な問題の一つが潜んでいるといってよいだろう。

３．部族とカーストをめぐる考察：仮説の実証に向けて

3.1　研究史と研究手法について

ベンガル周辺地域において、非アーリヤ部族が幾つかのカーストに分かれていく過程を考察した優れた研究が人類学者によって為されている [11)]。私自身も北ベンガルの Koch Bihar 王国における同様の過程を歴史的視点から明らかにした。だが、周辺山間部ではなく、ベンガル地方の中心を成す平野部におけるカーストの部族的起源を明らかにした研究は、管見の限

り存在しない。比較的早い時期にこの転態が生じた為に、そして、下層民の間の社会的変容に対する古代のバラモン著作家の無関心のゆえに、これを示す文献上の記述が存在しないのであろう。さらに、重要なことは、古代の著作家の大半はバラモンなど司祭階級に属し、彼らは諸カーストの起源を代々のバラモンの学僧が創り上げた浄・不浄の社会理論（Sankara、Anuloma、Pratiloma など）によって説明することを当然のこととしたから、それ以外の道筋は、たとえ見聞することがあったとしても、意図的に無視されたであろうことである [谷口晉吉 1995:649-665]。従って、ベンガルのカーストの部族的な起源に関する文献史料は少なく、その実証は非常に難しいことになる [12)]。

この難しい領域になんとか切り込むために、19 世紀後半以降、頭蓋骨や鼻、目の形状や大きさ・高さを指標として用いる形質人類学 Physical Anthropology の手法が導入され、H.H.Risley[Risley,Herbert H. 1969] を始めとして、多数の研究者が研究を重ねて来た。これと並行して血液型の研究なども行われた。これら従来の研究によって明らかにされた重要な事柄は、「ベンガルの人々の間の形質人類学的な地域内偏差は、ベンガルのバラモンと UP 州など北部インドのバラモンとの地域間偏差より小さい」ということである。つまり、ベンガルのバラモンなど上位カーストの人々の形質人類学的な特徴は、UP 州のバラモンよりも、ベンガル一般大衆のそれに近いということである。しかし、そこから先には殆ど進めず、さまざまな部族やカーストの比較、同定は、個々の研究者の経験と直感に頼るほかなく、諸説が入り乱れることになった。

しかし、近年になって、新人類 homo sapience のみならず、栽培作物や家畜などをも対象とする分子生物学（分子遺伝学、分子進化学、分子人類学）、歴史言語学、考古学が飛躍的に進歩し、文献史料の存在しない先史時代、つまり、アーリヤンの登場以前のインド亜大陸の人々と社会状況に関する新たな考察が試みられるようになってきている。また、古典文献研究においても、従来、注目されてこなかった社会諸集団（Kirata、Asura、Nishada、Mleccha、Dasa/Dasyu、Dravida 等々）を対象とする研究が徐々に厚みを増し、あらたな知見が蓄積されつつある。

以下 3.2 において、これらの新動向を踏まえることにより、ベンガルの部族とカーストに関して、どこまで探究のメスを加えることができるのかを素描してみたい。

3.2　人類（新人）の「出アフリカ」のルートと４大集団のインド到来

人類（新人）の起源に関して、現在までのところアフリカ起源説を覆す確かな証拠はなく、むしろ、近年の分子遺伝学の急速な進歩（女性系統の情報を示すミトコンドリア・デオキシリボ核酸 mtDNA と男性系統の情報を示す Y 染色体 Y-chromosome の全塩基類の解読、常染色体 Autosomol DNA の分析）によりアフリカ起源説は強化され、かつ、人類の系統変化がより

説得的に描かれるようになった。南アジアに関しては 2007 年に *The Evolution and History of Human Populations in South Asia* [Petralia, Michael D. & Allchin, Bridget (eds.) 2007] が刊行され、その他にも数多くの個別論文が発表されている。世界規模の見取り図としてはオッペンハイマー [オッペンハイマー、スティーヴン 2007] が有用である。ここに示されるように、約 10~20 万年前にアフリカにおいて発生し、それから数万年を経過した後にアフリカを出た新人類は、レヴァント回廊またはアフリカの角を通過して、一つの流れはイラン高原を越えてヒマラヤ山脈の北側に出、さらに、中央アジアを進んでいき、もう一つの流れはイランの海岸線を進み北西部からインド亜大陸に到来し、中央インドの高原地帯を抜けて南部インド、そして、東部インドへと到達した。これら諸集団は出アフリカから 2 万年余の時間をかけてゆっくりと移動しており、その間に様々な混和 admixture が繰り返され、また、様々な生態系の中で人口の増減を繰り返し、形質と言語文化を共有する幾つかの比較的に纏まった大集団が形成された。このような分化と進化はアフリカ内部でもすでに始まっており、4 つあるいは 8 つ（L0 ～ L3 あるいは L0 ～ L7）のクラスターが知られている。実は、アフリカ大陸の外に出たグループは、その内のただ一つ（L3）だけであり、それは 4 つの半数体集団 haplogroup（M、N、U、R）に分化し、世界各地に分散し、アフリカを除く諸地域に居住する現人類の祖となった。そして、これら 4 つのハプロ集団は混和と突然変異を繰り返す中で、更に多数の亜ハプロ集団 sub-haplogroups に分かれていったのである

オッペンハイマーによれば、およそ 85000 年前からおそらく幾波にも分かれてインドに到達した最初期の諸集団は 75000 年頃までにインドほぼ全域に展開し、さらに、その一部は東南アジアの半島部、島嶼部へと移動した。

2005 年に、インドの有力な分子遺伝学者団体である The Indian Genome Variation Consortium は、インドの人口を考察するにあたって、形態学類型 morphological types としては Caucasaid、Mongoloid、Australoid、Negrito（ただし、ネグリトはほぼ Andaman Islands のみ）の 4 つ、そして、言語集団として、Dravidian、Tibeto-Burman、Austro-Asiatic、Indo-European の 4 つを基本とすべきことを提唱している [The Indian Genome Variation Consortium 2005]。本稿でも、この分類を採用することが適切であろう。

オーストラロイドに関しては、インド亜大陸から東南アジアへ入ったという説と、東南アジアで固有の形質を形成した後にミャンマーを通ってインドに入ったという説とがある。そのどちらもが生じたと思われるが、分子遺伝学および考古学の知見は、前者がより大きな流れであったことを示唆する。また、言語集団ドラヴィディアンの大集団はイラン方面から入り、Indus 渓谷周辺に定住した後、インド中央部、そして南部へと移動し、その一部はインド中部の高原地帯を横切りオリッサからベンガル地方の北部に及んだと思われる。そして、後節で示すよう

に、Munda 部族の伝承はまさにこのような移動の経路を示しており、さらに、相当数に上る遺跡群や古地名もこの伝承を裏打ちしている。なお、前述の Consortium の 2005 年提言に載せられた地図１、地図２において言語集団ドラヴィディアンの分布は形態学的類型であるオーストラロイドの分布の中にほぼぴったりと収まっていることから、言語集団ドラヴィディアンは、形態学的にはオーストラロイドに属すと考えてよいと思われる。実際、19 世紀後半の人類学者には、オーストラロイドとドラヴィディアンを同一の人々であると考えた者もいる [Risley 1969:25]。

オーストラロイドにやや遅れてインド亜大陸に入った大集団にモンゴロイド（言語的にはチベット - バーマン）がいる。彼らは、中央アジアから Kashmir へ入り、Kailasa 山麓の Manasarowar 湖周辺から北インドの Garhwal、Kumaon の一帯に定着した集団と、ミャンマー、アッサムの奥地からインド亜大陸に入り、ネパール、北ベンガル、アッサムなどヒマラヤの東部南麓に広く分布した集団とがいた。

そして、最後に、Indo-Aryan（形態学的にはコーカサイド、言語学的にはインド - ヨーロピアン）と呼ばれている大集団がイランを通ってインダス渓谷に入り定着し、やがてガンジス渓谷沿いに東漸し、ベンガルのデルタにまで到達した。

こうして、先史時代のインド亜大陸には、アフリカを出た 4 つのハプロ集団（M、N、U、R）のすべてが到来していた。篠田によれば、インドでは、言語集団ではインド・ヨーロッパ語系が 80%、ドラヴィダ語系 18%、シナ・チベット語系 1.3%、Austro-asiatic 語系 0.7% と圧倒的にインド･ヨーロッパ語系が多いが、mtDNA の分析ではハプロ集団 M（アジア系）が 60%、U（ヨーロッパ系）15% となり、かなり様相が異なり、インド人の 60% 以上が多くのアジア諸国と共通する遺伝子配列を持つことになる [篠田謙一　2007:pp.71-76]。この内、ヨーロッパ系統とされる U はインド全域に満遍なく広がり、かつ、その分岐年代が 67000 ～ 51000 年前と非常に古いことから、アフリカから出た早い段階で分岐が生じていたと思われる。U が具体的には知られているいかなる集団に対応するのかは明らかでないが、ヴェダの啓典の民（俗に言う Indo-Aryan）とは区別される第 1 波が早い時期にインド亜大陸に入っていた可能性があろう [13]。

最後に付け加えるなら、常染色体 DNA に基づく最新の研究 [Zerial, Tatiana, et al. 2006: 137-144] は、「インドのカーストと部族は遺伝学的にはシステマッティクに異なるとはいえない」という結果を示していることは、異論 [Reich, David, et al. 2009: 489-494] もあるとはいえ、本稿の議論にとって重要である。

3.3　Pre-Aryan 期ベンガルにおける３大集団とそれらの相互関係

こうして、アーリヤンがベンガルに入る前に、オーストラロイド、モンゴロイド、ドラヴィディ

アンの 3 大集団が既に居住を開始していた。前述の Consortium 提言によれば、言語集団ドラヴィディアンは形態学的類型ではオーストラロイドに含まれると考えられるが、ここでは通例に従って別個に扱う。では、これら諸集団はどのような順序でベンガルに至り、相互にどのような関係を構築したのであろうか？これについては、考古学、文献学、歴史言語学などの成果に基づいて一定の推論を行うことができる [Chattopadhyaya, Annapurna 2002-2006; Chatterji, Suniti Kumar 1974; Singh, G.P. 1990]。

インドへの到達の順序においては最も古いのはネグロイドと言われる人々であったが、かれらはその後に来たオーストラロイド諸集団に吸収され、インド亜大陸ではもはや殆ど痕跡を留めず、ベンガル湾のはるか沖合のアンダマン諸島に僅かにその存在が確認されている。オーストラロイドはインド全域に展開し、ベンガルにおいても平野部から山間部にかけて広く定住した。ついで、ドラヴィダ語を話す人々が北西からインド亜大陸に入り、インダス河渓谷地帯に展開した後、南インド、中央インド、東インドに移動した。彼らが東インドに到達した時期は確定できないが、モンゴロイドが入った時期より多少遅かった可能性がある。モンゴロイドの移動はチベット、カシミールの方面からヒマラヤ山脈を抜けてインド亜大陸に入り、Garhwal、Kumaon に定住した集団とミャンマーの北端やアラカン山脈を越えてアッサム、ベンガル東部に入った集団とに分かれる。そして、モンゴロイドと相前後して、アーリヤンが北西インドに到達した。彼らが東インドに到達したのは、上記 3 大集団の入った後であったと思われる。

ベンガル、アッサムでは東から来た攻撃的な侵入者として支配階層を成したモンゴロイド（キラータ）がオーストラロイドとドラヴィディアンの混成人口の上に強力な非アーリヤ系国家を樹立したと思われる。但し、ここで留意すべきなのは、オーストラロイド、モンゴロイド、ドラヴィディアンの間には、初期の頃から濃密な混和が生じ、その結果 3 者の間には宗教的にも、言語的にも、そして、政治権力的にもかなりの程度の融合・融和が生じていたと思われることである。時代は下がるが、13 世紀にアッサムに侵入し王国を樹立した Ahom の兵士たちは地元の女性を妻とすることを義務付けられていたことが想起されてよい [Chatterji,S. 1974: 103]。従って、この 3 者の区別・差異を固定的に把えてはならない。モンゴロイドが頂点に立って形成された東部、北東部インドの秩序はその成立初期からガンジス上流のバラモン教世界からの脅威を受けていた。その様相と帰結は、後述するナラカ王伝説の項において示したい。

ところで、バラモン教の哲学的発展に於いて最も重要な概念として karma、samsara（業、輪廻）がある。最初期の聖典 Veda にはこのような概念はなかったが、紀元前 500 年頃までにこれらの概念が確立している。これは、オーストラロイド、ドラヴィディアン、モンゴロイドなど先住民からの借用である可能性が高い [Chatterji,S. 1974: 58-63]。Mahabharata で語られたアーリ

ヤンの有力王国 Pandava の 5 王子が一人の妻を共有する逸話は、チベット - モンゴロイドの一妻多夫制を想起させる。しかも、Pandava の兄弟は、ヒマラヤの山中で育っている [Chatterji,S. 1974: 58-63]。Mahabharata の時代には異なった系統（ハプロ集団、亜ハプロ集団）の人々の間の混血が頻繁に生じていたのであり、そのような状況では系統間の文化的距離は意外に小さく、思想・習慣の借用が生じやすかったのであろう。

こうして、カースト制度が確立する以前の、文化創世記におけるインド亜大陸では、異なった系統の人々の混和、融合が無視できない程度において進行していた。だが、後節に述べるように、この時代は同時にインド亜大陸の政治的文化的ヘゲモニーを巡る熾烈な戦いと安定した生活基盤を求めての移動の時代でもあった。

3.4　古典文献等から知りうる諸集団とその存在形態

以上の 3 大集団は文字文化を持たず、あるいは、文字があっても未解読であるために、文字を持った第 4 の大集団 Indo-Aryans が残したこれら先住 3 大集団に関する記述は曖昧かつ矛盾だらけであるとしても、非常に貴重である。これと彼ら自身が残した砦、都市、彫刻、共同墓場、地名、そして、遺伝子情報などを組み合わせることによって有史時代以降の彼らの状況を再構成することになる。まず、問題となるのは、アーリヤンの文献で非アーリヤンの人々がどのような名称で呼ばれ、また、それぞれの集団がどのような特徴をもつとされていたのかを明らかにすることである。名称については、古典文献を検討することにより一定の答えを得ることができる。Annapuran Chattopadhyaya、Suniti Kumar Chatterji、G.P.Singh などの先行業績 [14] にもとづきながら考察した結果だけを示せば、下記のような対応になる。ただし、この対応は、時期によりまた地域により変化するし、さらに、それぞれの呼称がいかなる機能的単位として把握されていたのかについても決して一定ではない。したがって、この整理は、多くの例外や重複を許すおおよその目安にすぎない。

Mongoloid：Kirata、Mleccha、Asura、Danava、Yavana

Australoid：Nisada、Bhilla、Kolla、Pulinda、Savara、Mleccha、Asura、Danava、Yavana、Dasa-Dasyu

Dravidian：Dasa-Dasyu

3.4.1　モンゴロイド

3.4.1.1　キラータ [15]

若干の異論 [Singh, G.P. 1990: 65] はあるにせよ、キラータはモンゴロイドとほぼ同義といってよく、古典文献に多くの記述がある。先述したようにキラータの一集団は、Kailasa 山麓の

Manasarowar 湖周辺から Garhwal、Kumaon にかけて集住し、Kailasa 山麓の Kiratadesa には 15 万もの集団（grama）があったと述べられている。もう一つの集団はネパール、ビハール北部からブータン、アッサム、そして、トリプラまでの広大な領域に居住した。後者においては、ネパールの Newar 族とアッサムを中心に展開した Bodo 族（Koch、Mech 等々を含む大きな語族）が 2 大支配勢力をなしたことは間違いない。ネパールでは、キラータの中で支配的な部族は Newar だが、その他にも、Lepcha 族、Limbu 族などが有力であり、それぞれ多くの支族に分かれ、また、近縁諸部族を擁した。Mahabharata の時代には、ヒマラヤ山中に多くのキラータの国があったとされる。例えば、Limbhu 族、Kiranti 族は、前者は Kosi 河と Mechi 河に挟まれた Limbhu-desa に、後者は Kosi 河と Karki 河にはさまれた Kiranti-desa に住み、隣接していた。Limbhu 族は、大きく Hung と Rai という 2 集団に分かれ、さらに、その下位には Das Limbhu（＝ 10 の Limbu 支族）があった。チベットの Tsang から移住してきたと考えられており Tsong（その訛りは Chang）とも呼ばれるし、Subah、Suffah（首長）とも呼ばれる。Lhasa から来たという伝承もある。顔は平板、目はやや吊り目、黄色い皮膚、髭は少ないなど、Tibetan との共通性が高い。彼らはネパール東部の支配部族であった。その社会は多数の内婚集団に分かれ、さらにその内部にトーテム、傑出した先祖、領域などを基盤として形成された複数の外婚集団がある。部族会議が Limbhu の最高権威である。Murmi、Lepcha、Bhutiya など親近性の高い他部族の者は、部族会議が認めれば成員として迎えられる。Mahadeva を信仰し、その他多数の神を持つ。精霊を信じ、シャーマン、魔術を信じる。牛、豚、その他の肉を食い、ヒンドゥのカースト制度の外にある。

そして、古代に於いては、彼らは隣接するオーストラロイドの Kol 族とも混和関係を結んでいたと言われる。ある時期には、この両者の上に、共通の王 Suvahu が存在した可能性もある。こうして、アーリヤンが到来する以前に、すでにオーストラロイドとモンゴロイドの両系統の人々が同盟を結び、地方的な政治権力を構築していたという推測が可能である。そして、このような政治権力的状況の中で、非アーリヤン世界において、宗教、言語、文化などにおける融和が進行していた。例えば、キラータの女神 Kiranti をオーストラロイドとされる Savara 族が祀り、逆に、Savara 族の女神 Vindhyavasini をキラータの人々が信仰していたことが知られているし、両者の言語複合も生じている。後述するアッサムの Pragjyotisa 国のナラカ王が拠ってたった政治構造も、恐らく、このような複数の系統の部族の連合にあったのであろう。

なお、キラータを巡る伝承には、彼らが山中の薬草、香草、香木、金銀、宝石などを採集し、皮革、綿布、毛織物などの工芸品を製作し、アッサム、北部 Myammar、雲南を越えて、中国との間の絹の取引に携わったことなどが述べられており、また、水上運輸に長け、勇猛な戦士であり、軍象を操るなど、当時の先進的な文明を有していた。

3.4.1.2　Licchavi[16)]

古代 Buddha の時代に、北ビハールに強大なモンゴロイド系氏族 Licchavi が存在した。仏典に記述された彼らの生活や文化－例えば、死体の野葬や一妻多夫制－は明らかに非アーリヤンのものである。しかし、言語面では早い時期にチベット - ビルマ語を捨て、アーリヤン系言語を用い、その権力と組織力のゆえに、北ビハールでは Kshatriya の身分を勝ち取った。これは後世の Gorkha ら多くの部族にみられたパターンである。Licchavi は名族となり、はるか後、紀元 4 世紀の Gupta 帝国の創始者は Licchavi の血脈につながることを誇りとしたし、ネパールでは紀元 350~879 年と 500 年以上も Licchavi 朝が存続した。Kshatriya 身分を有することは、かれらが純粋なアーリヤンであることを証明するものではなく、Manu 法典で Licchavi を Malla、Khasa と並んで Vratya（堕落した Kshatriya）と呼んだことは、むしろ、彼らがモンゴロイドあるいは混血部族であったことを示唆すると考えるべきだろう。

3.4.2　オーストラロイド

オーストラロイドに属すとされる Nishada、Kola（Kolarian）、Savara などについては、古典文献に数多くの言及がある。彼らこそがインド最古の住民をなし、インドの多くの地域の最初の開拓者として土地の神々（地母神）との強い関わりをもつ存在であり、アーリヤンの支配が確立し、彼らが社会の最下層に位置付けられた後においても、各地において無視しえない重要な儀礼的役割を果たし続けている。現在もなお村人たちが信仰の対象としている村の神々（gramdevota）[17)] の大多数は彼らのものであるし、幾つかの全インド的重要性を持つヒンドゥ寺院（例えば、オリッサ州 Puri の Jagannath 寺院）においても彼らは特別な地位と職務を与えられている。

彼らの社会状況について記述する紙幅がないので、同じオーストラロイドの代表的な一部族である Munda に関する後節 4.3 の記述をもってそれに代えたい。

4.　部族社会の変容ーベンガルのバラモン教的再編成

4.1　ナラカ王伝説[18)]

北東インドには古くからオーストラロイドの人々が定住しており、その後に、キラータと総称されるモンゴロイド系の集団が到来した。両者はアーリヤンによって Mleccha、Asura と認識されていた。彼らの伝説の英雄がナラカ（Naraka）である。確証は得ないが、ナラカは彼らのすぐれた指導者 (王) に付けられた尊称であり、従って、何人ものナラカが存在した可能性がある [Choudhury, Pratap Chandra 1987:109-127]。ナラカの語義には、人々（nara）の守護者（ka）あるいは大地から生まれた（Bhauma）王族という説などがあるが、いずれにしろ、普遍性をもった名称だと考えられる。

紀元前 1000 年頃、北インド Mithila（Videha）の Janaka 王は孤児であった Asura の少年を宮廷で他の王子と共に育てた。この少年が何事においても卓抜な才能を示したので、王が将来を恐れるようになったことを知り、16 歳になった少年は一団の従者を伴って宮廷から出て行った。少年は放浪の後、Lauhitya 河（Brahmaputra 河）の河畔、Gauhati 近辺に都を持つキラータ族の王 Ghataka と戦ってこれを破り、彼らの王となった。彼はナラカと名乗り、Pragjyotisapura に都を定め、強大な王国（Pragjyotisa または Kamarupa）を築いた。なおこの当時、他にも 7 つ以上のキラータの王国がヒマラヤ南麓地帯に存在していたことが知られている。Kalika Purana など後世の文献では、ナラカは Vishnu の化身であるイノシシと地母神の間に生まれた息子であるとされ、イノシシが王家の紋章となっている。

さて、ナラカ王は、王国の行政制度を確立するためにかつて彼が育った Mithila から多くの僧侶や行政官僚を呼び寄せ、王国の東部の肥沃な土地を与え定住させた。この為に、彼は、Karotoya 河と Lauhitya 河に挟まれる地域に住むキラータ族を Brahmaputra 河の東岸に移住させたと言われている。キラータの人々の間に、バラモン教徒が入り込み王国の重要な役職を独占したことに対する強い不満が生じ、また Sonitpur（現在の Tezpur）を都とする友好的な隣国の王 Banasura の忠告もあり、彼は呼び寄せた Mithila の人々に帰国を強要し、行政役職をキラータの人々に戻した。さらに、バラモン教世界で最高の尊敬を受ける聖者 Vasishta が彼の領内の Kamakhya 女神の寺院に参拝を望んだ際に、これを拒絶した。バラモン教世界はこれらの行為をナラカ王のバラモン世界に対する挑戦ととらえ、Krishna に命じてナラカを討伐させた。アーリヤン（Deva）達はこの Narakasura に対する大勝利の後、王国をナラカの息子 Bhagadatta に継承させた。Bhagadatta は敬虔なバラモン教徒であり、こうして、北東インドはバラモン教圏、アーリヤンの勢力圏へ組み込まれた。この Bhagadatta は Kurukshetra の戦いに際しては、キラータと China の軍勢を率いて参戦し、Bhima と Arjuna の両名と激戦を繰り広げた末に討ち死にしたが、Kamarupa 王国は長期にわたって彼の一族の下で存続し、初期の王達は、ナラカ、または、Bhagadatta を名乗った。

なお、S.K.Chatterji によれば、アッサムでは、紀元前 10 世紀頃から多くの王朝が Mleccha の王（Mleccha は Mech のサンスクリット形）を名乗り、Mech 族であることを誇示している。この系統の最後の王朝は Pralambha 朝とよばれ、紀元後 800~1000 年にかけてアッサムを支配し、その王はナラカの末裔を名乗った。Pralambha 朝を継いだアッサムの Pala 朝の初代 Brahma-pala 王は選挙によって王に選ばれたのであるが、Bargaon 碑文が「人々は彼らの主君は大地の子（Bhauma）であるべきだと考えた。」と述べる様に、彼もまたナラカに連なる一族であること主張している。

ナラカ王伝説は、北東部インドにおいてキラータの部族国家が王国へと転じ、さらにバラモ

ン教化する最も早い事例であり、その後、多くの部族国家における王権の成立とバラモン教化という歴史的変容の祖型となったということができる。そして、この伝承は、土地の施与を条件としたバラモン教世界からの多数の支配層の導入、彼らと元来の土地の住人であるキラータ達との軋轢、バラモン教化の一時的頓挫と武力によるバラモン教支配の最終的な確立、バラモン教世界と部族世界の狭間に置かれたナラカ王の悲劇的最期が象徴する文明の相克に伴う苦悩など、その後、ベンガル平野の周辺で繰り返される部族社会のバラモン教化の過程の典型的な類型として強い訴求力をもつと言ってよいであろう。

4.2　Koch Bihar 王国 [19)]

12 世紀前半に Pragjyotisa（Kamarupa）のパーラ朝（ベンガルのパーラ朝とは全く別の王朝）が崩壊し、その後、ベンガルのゴウルから入り王国を樹立した Deva 朝に対して 13 世紀後半には多くの地方土豪、部族首長による反乱が相次ぎ、王権国家において進行した現地社会のバラモン教化の影響は幾つかの地域に押し戻された。こうして、ナラカ王の息子 Bhagadatta 王の下で始まったバラモン教化の大きな波は、13 世紀後半から始まった部族社会の抵抗によって勢いを失い、王権の支持を失ってその進行は止められた。こうして、「カーマルーパは無政府状態に陥り、･･･ベンガル語を話さず、バラモン教を奉じないさまざまな野蛮な部族、コッチ、メッチ、ガロ、カチャリ、ラバァ、ハジョング、トゥリプラ、ブゥト、ネプチャがこの国を蹂躙した」[Buchanan Hamilton 1830: 12]。こうして、この時期の部族民の大きな部分は、部族の固有文化と社会慣行に従って生活したと思われる。

この様な状況が一世紀ほど続き、土豪、部族首長が相争うなかで、アシュラに属す Khyen 族が広大な王朝を樹立し、その王権下で、再びバラモン教化への道を歩み始めた。だが、この王朝は、ベンガル平野から攻め入ったパターン系スルタンに敗れ、カーマルーパは、またもや地方土豪、Koch、Bhutia（ブータン）、Ahom の 4 大勢力が覇を競う戦乱の時代を迎えた。

この混乱状態を終息させたのが、16 世紀初頭に建国されたモンゴロイド系 Koch 族の王国である。Koch 族は有力支族が内部対立を重ねていたが、Mech 族の有力者と手を結んだ族長ハジョが、Koch、Mech を統合し、その息子ビシュは敵対する地方土豪、部族長達を平定し、カーマルーパに秩序を回復した。彼は 1522 年、王たることを宣言し、こうして Koch 族の王国が樹立された。彼は、王国建設の初期には、彼を支持する部族の有力な 12 名の首長を王国の要職につけ、その都も Mech 族の本拠地に置いた。彼の権力基盤は最初は部族連合にあったと考えてよい。しかし、彼の権力が確立すると、彼は王権を部族的な紐帯から切り離す「脱部族化」をはじめる。まず、国内成人男子のセンサスを行い、徭役制度を導入して、部族組織とは別個に、王国の労働力と軍事力の供給システムを確立した。この新統治方法は、隣国 Ahom

から学んだ可能性が高い。そして、新たにバラモンが招請され、そのバラモン達はビシュは変装した Siva 神の息子であるという神話を「発見」し、ビシュ自身も神の子であることを宣言し、名前をビッショ・シング Biswa Singh と改名し、シヴァ信徒となった。更に、王国内各地に王立寺院を建立してバラモンを配置し、シヴァ神やドゥルガ女神を祀らせた。また、北東部インドの有名な新ヴィシュヌ派指導者シャンカラデーヴァ Shankaradeva を宮廷に招き、サンスクリット文献の現地語訳を進めた。

ビッショ・シングにより開始されたカーマルーパの部族社会のバラモン教化は、その息子ナラ・ナラヨン王の下でさらに推進されたことが、『大王家伝書』に述べられている。それによれば、彼はバラモンの学僧に命じて、臣民が服すべき生活規範をヒンドゥ経典に基づいて制定させ、カースト制度を導入してそれぞれの宗教的義務を果たすことを求め、それに反する者を厳しく罰した。だが、強大な王権の下にあっても、住民のバラモン教化は決して順調に進んだとは言えなかった。彼は、王国の北半分では、部族信仰を保持し各寺院で Koch 族、Mech 族の司祭が儀式を行うことを、許可せざるを得なかった。寺院でバラモンによりバラモン教儀礼が執行されたのは、国の南半分に留まったのである。

更に時代が下がって、19 世紀初頭に、この地方で綿密な調査を行った博物学者ブキャナンは、Koch 族の祖形に近い人々が森林の奥地で他との接触を断って、部族の固有文化と生活慣行を守って生きていることを報告している。彼らは、焼き畑農業を行い、綿花、陸稲、黍などを混植し、布を織り、藍や茜で染色し、生活に必要な殆どの物資を自給していた。彼らは、酒を飲み、豚・家禽類の肉を食べ、寡婦の再婚を許した。財産は女系相続され、夫婦は妻方居住するが、社会を代表し、秩序を維持するのは成人男子の集会であった。宗教は、部族神がおり、自然と先祖を崇拝する素朴なものであった。司祭（デオシ）は同族の者が勤めるが、世襲ではない。雨季の終わりには部族の年祭を催した。魔除け師、医師の役割を果たす者（オジャー）もいた。

このような焼き畑に生活の基礎を置く集団では、10~40 世帯ほどが一つの作業単位を成し、共同で森林を伐採し、樹木や下草を燃やし肥料とするが、農業自体は各家族が行った。除草と収穫期の作物の見張りには大量の労働力が必要であり、そのために一家族で耕作できる面積には制限が生じた。数年間連作すると、雑草の繁茂が甚だしくなり、森林を開き、次の焼き畑地に移っていく。このような生産形態にあっては、各家族の土地に対する所有権は発生せず、土地は共同所有となる。だが、ヒンドゥ社会の定着農業の技法、特に、犂耕作が導入されると、同一の土地で連年の耕作が可能になり、土地に対する各家族の所有権が発生する。これは、部族の人々の共同作業の重要性を大きく低下させ、各家族が部族共同体から独立して生計を立てることを可能にする。こうして、ベンガル平野部の周辺域では、進んだ農業技術の導入が共同作業の衰退と部族組織の解体を促し、同時に、ベンガル語が農業用語などを通して部族社会に

浸透し、それと共に、徐々にバラモン教の様々な神々や禁忌（浄－不浄の概念）が部族社会に入り込んでいく。そして、部族の人々も、徐々に、バラモン教的な不浄な行いを避け、バラモンの教えに耳を傾けるようになっていった。

この歴史的動向の中で、Koch 族の中にも、定着農業に移行しベンガル語、バラモン教、生活規範を受け入れた人々、バラモン教は受け入れないが進んだ農業技術を取り入れて定着農業に移行しベンガル語も徐々に導入していった人々、そして、それらを固く拒み、犂の導入さえも行わず、部族の固有の文化、言語を守り、森林の奥に後退し焼き畑農法を墨守する人々が生じた。第 1 タイプは、自らを Rajbamsi と呼び、ヒンドゥ世界のカースト秩序に自らを位置付け、第 2 タイプは、部族名 Koch を依然として用いるが、徐々にバラモン教世界との交流を深めており、第 3 タイプはダウィー、ゴロル、ゴラミなどと呼ばれ、孤立を深めた。こうして、19 世紀初頭においても、なお、Koch 族のバラモン教化の過程は決して完了してはいなかった。この Koch 族の 16 ~19 世紀の一大社会変容は、部族社会がバラモン教世界に包摂されていく際の殆ど全ての特徴を与えている。ヒンドゥ王権の成立によって一度始まった部族社会のバラモン教化が、王権の転覆により頓挫し、それに代わって部族国家と部族文化が再び勢いを取り戻すが、国王による部族国家から王権国家への転換が国王自身のヒンドゥ化と共に進行し、国王が支配の正当性を主張するために招請した多数のバラモンとヒンドゥ再生族（上位カースト）への広大な土地の施与と、彼らによる進んだ農法の導入が、焼き畑農業に基礎置いた部族社会の経済的基礎を掘り崩し、部族の中に新たな農業とバラモン教的生活規範の導入を容認する集団としない集団という亀裂が生じ、後者は伝統文化を守る為にバラモン教の影響の及ばない奥地へと退いていく。王権は、定着農業を基礎とした安定した財政と外部から呼び寄せたバラモン教エリートの国家行政能力により部族的基盤から独立した王権国家への道を進んでいき、その中で、本稿では触れなかったが、一般の部族民たちは外部から入ったヒンドゥ教徒たちによって土地を奪われていったのである。

4.3　Munda 社会 [20)]

Munda[21)] はオーストラロイドの中で最も代表的な部族の一つであり、より大きな Kol 族（Kolarian）に属す 1 つの部族をなす。Sarat Chandra Roy は、インドにおける Munda の社会と歴史の研究における草分けであり、彼が 1 世紀前に書いた名著 *The Munda and their Country*（1912）は今なお東部インドの部族社会研究において重要な位置を占めている。彼は多くの Munda が居住する Chotanagpur 地方の Ranchi 市において、外部から来たヒンドゥが Munda の土地を安く買い叩くことを阻止し、Munda を守る為に奔走した法律家であり、多くの Munda との長年にわたる交流から、彼らに伝わる貴重な伝承を細部に至るまで聞き取り、

その口伝を、サンスクリット古典や、各地の地名、遺跡などと照合することによって初期の Munda の歴史を蘇らせた。以下の記述は、彼の業績に負う。

Munda が Chotanagpur に安住の地を見出す以前の、記憶されている最も古い居住地は北インドの Azamgarh 高地である。それ以前の移動の歴史については伝承は何も語らない。彼らは、ここで長期にわたって棚田を作り、暮らしていた。その時期は、アーリヤンがインドに到来した時期と重なり、Munda は新来のアーリヤンと戦い、また、他の Asura とも激しい戦いを繰り広げた。アーリヤンの最初期の文献であるリグ・ヴェーダで、Munda は Dasa-Dasyu と呼ばれており、多くの都市を持ち、多数の砦を築いたとされる。

だが、リグ・ヴェーダ以降のサンスクリット文献には最早 Munda に関する記述は殆どなく、彼らの古代史を再構成するには、Munda の伝承と考古学的遺物に頼らざるを得ない。Munda がいかなる理由で何時 Azamgarh を離れたかは明らかでないが、彼らが南下し、中央インドに至り、そこからラージプタナ東部を通って北西インドにもどり、さらに、東に向かい、ロヒルカンド、アワド、ビハールと進み、そこから Sone 河に沿って南下し、ついに、Chotanagpur に到着した。この間、彼らは、各地で恐らく数百年規模の定住と出発を繰り返したが、その過程で、森林を切り開き、多数の定住地と砦（garh）を築き、そして石を置いた墓場に死者を弔い、かつ、土地ごとに築いた村や貯水池に Munda 語の名前を付け、時には本隊と分かれてその地に永住する小集団を残した。それらが、彼らの道程の確かな物的証拠となっている。そして、各地の伝承にも Munda との交渉が触れられている。かれらが長期間逗留した場所は、例外なく河と険峻な山脈によって形成された要害の地であり、彼らがいかに外敵を警戒しながら移動を繰り返したのかが窺われる。アーリヤンはこの間何度にもわたって Munda に対して討伐軍を送っているが、多くは失敗に帰したようである。この頃、Munda としばしば衝突した非アーリヤン部族として Bhar が挙げられる。Munda 本隊と長期間行動を共にしたドラヴィディアン系 Chero 族は王を持ち、紀元 6 世紀頃までにヒンドゥ化し、Munda と袂を分かった。Chotanagpur に到達した後も、各地を放浪し、その間に同族の Santal とも袂を分かち、現在の Manbhum、Singhbhum に至って漸く長い流浪の旅を終え、その深い森林の国（Jharkhand）に安住の地を見出した。

この土地で、Munda は外敵に煩わされることなく、自分達の社会組織を築いた。Munda の最も基本となる単位は hatu と呼ばれる村である。この村では、開基者とその子孫（khuntkattidars）が特別の権利を与えられた。Hatu はまず村域を、村境の 4 点を定めることによって決定し、その域内の荒蕪地、耕地、丘陵、森、河などすべてが開基者と村に住むその一族の共同財産となった。森の一部は、村神（hatu bongkako）のために留保され、村の入会地（sarna）となった。この入会地の利用は規則によって厳しく規制され、森林資源の枯渇を

妨ぐように工夫されていた。この村の長を Munda と呼び、その職は世襲となる。村の開基者の父系一族を kili と呼ぶ。各村には村司祭 pahan がおり、Munda がこれを兼ねることも多い。やがて、村の中に開基者の父系集団（kili）以外の人々が住むようになった。彼らは、妻方の kili の男子であったり、鍛冶屋、牛飼い、織工などの基本的なサービスを提供する人々であった。彼らは他村の者（eta-haturenko）、または、従属住民（parja-horoko）と呼ばれ、村入会地の利用権は持たず、開基者一族（khuntkattidars）が割り当てた土地の収穫物で生計を立てる。この村落が古代 Munda 社会の基本的政体となり、もっとも本源的な集団となる。村長はあくまで同族中の第 1 人者であり、特別な権利を有する訳ではないが、戦闘などにおいては村兵を率いる。この様な村が十二ヵ村あつまって patti と呼ばれる上位団体をなし、最も有力な Munda が patti 長に選ばれ、manki と呼ばれる。この patti に属す人々は戦争や領域の防衛のための軍役のみを義務として負っていたが、各村の村長（Munda）は、manki に様々な生産物を定期的に贈るようになり、これはやがて貢納義務へと変化した。そして、manki 職、Munda 職も世襲化していった。各村では、長老会議（panch）が組織され、村長を補佐した。村内の紛争や懸案事項はこの長老会議において慣行に従って裁定され、その裁定には強制力があった。村を越えた諸問題（村と村との紛争や部族の共通利害に関わる重大事）に対しては manki が patti-panch（parha-panch）を召集し、対処した。こうして、Munda 社会の秩序は panch によって維持された。

やがて、Chotanagpur にドラヴィディアン語系の Uraon 部族が入り込むようになり、Munda と Uraon の利害の調整が不可欠となった時、この地方の多数の manki の中から指導者が選ばれることになり、最も優れた者として衆目が認めた人物が全 manki の長になった。彼は Munda ではなく Uraon 出身者であった。この人物の下で、この地に Chotanagpur（Nagabamsi）Raj と呼ばれる王家が出現し、村落の集合体からなっていた Munda の国に王権が出現した。その時期はおおよそ紀元 6 世紀頃であったと考えられる[22]。Chotanagpur の最初の開発者は Munda であり、多くの地名や村名には Munda 語が使われ、Uraon の村でも Munda が司祭を勤めた。Munda の khutkattidar 達は、王国の軍隊に兵士を送り、王に敬意を表したが、王に特別の権限を認めなかった。しかし、王は徐々に国王としての強い権限を主張するようになり、共和的な自治を重んじる Munda との間に軋轢が生じた。Uraon は急速に人口を増加させ、Munda を圧倒する地域も出現した。Munda の中にはこのような状況を嫌って更に南に移動する集団もあった。国王や manki はその地位が世襲化する中で、他の Munda の一般民衆との違いを強調するようになり、ヒンドゥの上位カーストとの婚姻を繰り返して、自らを特別の存在とし、maharaja、raja、thakur、tikait などと呼ぶようになった。

こうして、Munda 社会に王権が生まれ、バラモン教と結びつく中で、徐々に、カースト的

な身分制が生まれ始めた。

なお、Chotanagpur に安住の地を求めた諸部族の中には、部族の中から王権が形成されたオーストロ・エジアッティク語系の Bhumij 族やドラヴィディアン語系の Chero 族など、Munda とは異なる王権の成立の過程を歩んだ部族もある。これらの諸族の類似点と相違点を明確にしていくことによって、さまざまな興味深い論点が浮き上がってくると思われるが、本稿では、そこまで考察対象を広げることはできない。しかし、Munda 族について素描した社会構造や厳しい政治的状況などについてはかなりの程度において各部族に共通性が見られるし、前節で取り上げた Mongoloid 系統 Koch 族の王権形成とも重なる部分が大きく、モンゴロイド、ドラヴィディアン、オーストラロイドといった系統上の違いを越えて、これら諸部族が辿った部族からヒンドゥ社会への変容の歴史的道筋には多くの共通点が見出せる。

さらに指摘するなら、ここに示されたヒンドゥ社会に移行する以前の Munda 社会の組織構造は、典型的とされるインド村落共同体と、カーストの有無という重要な差異はあるが、非常によく似ている。部族社会がヒンドゥ社会の祖形をなしたと考えることも十分にありうることである。

また、本稿 3.2 節で言語上のドラヴィディアンは、形態類型学的にはオーストラロイドと重なるという指摘を行ったが、ドラヴィディアン語系に属すとされる Uraon 族や Chero 族が長期にわたって Munda 族と行動を共にしたという Munda や Chero の伝承が正しいとすれば、それを可能とした共通性が両者の間に存在したことを示唆しているといえるであろう。

５．部族・カーストの分布と地域類型論

ベンガルの辺境を成す西南部（Midnapur）、西部（Burdwan、Bankura、Birbhum）、北部（Koch Bihar、Jalpaiguri、Dinajpur、Rangpur）、南東部（Tippera、Chittagong）の諸県では、それぞれの地域の大半を占めるドラヴィディアン系、オーストラロイド系、モンゴロイド系の人々の上に、バラモン教的社会秩序が布かれたことに疑問の余地がない。従って、それぞれの系統の部族集団の分布の濃淡がそれぞれの地域社会のカースト構成や社会的特質に大きな影響を与えたであろう。特にこれらの周辺地域では、それぞれ特徴あるドミナントな部族集団が存在し、それぞれの地域社会の特徴を生みだしていた。

しかし、実は、ベンガル地方の中心をなす平野部でも、それぞれの地域において上記 3 系統のいずれかが社会の基層をなし、その上に特色あるカースト構成が生まれるという社会構成原理においては、周辺部と大きな違いはなかったと思われる。ただ、中心部では、より早い時期にアーリヤ化が進み、基層をなす部族的なまとまりはカースト的秩序によって大きな程度において代替されていた。とはいえ、ベンガル中心部においても、部族的基層がそれぞれの県社会

のカースト構成に固有の特徴を与えていると考えられる。Munda 社会の開基者の一族の特別な権限は、ベンガルに見られた junglebari zamindar（開発地主）に近似しているし、長老会議による自治的秩序の維持は、ベンガルにおいては、村の裁定会議（salis）として今日なお存在が確認される。こうして、ベンガルの村落秩序のあり方は、バラモン教的身分秩序とは異なり、むしろ、Munda において典型的に見られた部族的な社会秩序に近似しているという見解も成立しうる。

まとめ

バラモン教の影響が及ぶ以前（先史時代）のベンガルの人口の圧倒的大部分（すべてと言ってもよい）を占めたのは非アーリヤ系諸社会集団であった。人類を構成するとされる 4 大ハプロ集団の内、アーリヤンを除く 3 集団がすでに先史時代にベンガルに到来していた。その中で最も早く居住をはじめ、恐らく、人口的にも最大部分を占めたのはオーストラロイドの人々である。その後、モンゴロイド、ドラヴィディアンの集団もベンガルに到達し、この 3 者間で相互の混和が進んだり、地域的な棲み分けが行われたり、また、相互に激しく戦う場合もあった。3 者の抗争においては、S.K.Chatterji の歴史言語学の議論 や Mahabharata などの記述に従えば、モンゴロイド系統の諸部族が支配的な位置を占めたと思われる。

ベンガルにおけるモンゴロイドの政治的優越の中で、最大人口を擁したと思われるオーストラロイドの人々は、オリッサとビハール南部に広がる Chotanagpur を中心とした山間部と高原地帯を占拠し、多くの支族に分かれ、固有の文化・社会慣行を保持した。だが、彼らの間でもバラモン教の影響が徐々に進行し、部族社会から王権国家への移行が進んだ。

アーリヤ勢力がベンガルに到達し、バラモン教が徐々に浸透を始めた頃、北部ベンガルからアッサムにかけて諸部族を糾合してモンゴロイド系の Pragjyotisa（Kamarupa）王国が成立し、王ナラカの下でこの地方のバラモン教化の流れが始まった。彼の辿ったとされる悲劇的な末路は、王としての部族組織からの自立願望とバラモン教世界への憧憬、固有文化・従来の制度を守れという同族からの要求などに挟まれて、彼の政策が屈折したものとならざるを得なかったことを示している。その狭間にあって、ナラカ王はバラモン教世界から背信者として討伐されることになった。勝利者であるアーリヤ勢力の支持によって、ナラカ王の息子 Bhagadatta が Kamarupa 王国を継承し、北ベンガルからアッサムにかけてのバラモン教化が進行した。王 Banasura と連盟を結んでバラモン世界に対抗する姿勢を見せたナラカ王の敗北は、ベンガルへのバラモン教の浸透の最大の政治的障害が除去され、ベンガルのバラモン教化の歴史的帰趨が決したことを意味しており、バラモン教世界はこの勝利の歴史的重要性を明確に認識していたと思われる。

この政治情勢の中で、国家権力の支持の下でバラモン的社会秩序がベンガルに根付いていく。Maurya 朝、Gupta 朝の二大帝国、Pala 朝、さらに、Sena 朝などの下で、バラモンの招請と土地の施与、つまり、国家権力によるバラモン教の布教の支援が組織的に行われた。特に、Sena 朝期にバラモンへの土地施与文書が急増している。

本稿の目的にとっては、ベンガルがこうしてバラモン教世界（Aryavarta）へと変容していく中で、どのようにして先住諸部族の人々がカースト的秩序に再編成されていったのかを具体的に跡付けることが重要である。だが、この点に関して、サンスクリット文献は直接的には殆ど何も語ってくれない。古典文献に登場するベンガルの人々は、個別カースト名で語られることは殆どなく、Kirata、Pulinda、Nishada、Dravida、Savara、Chola、Karnataka、Oddra、Asura、Mleccha、Gauda、Dasa-Dasyu（そして恐らく Chandala）などより大きな集団として集合的に記述されている。古代においてはこれらの大きな集合単位こそが意味ある単位であり、カーストが意味ある社会単位となるのはより後の時代であった。そこで、我々は、一挙に、個々のカーストに迫るのではなく、まずは、これらの集合的名称が何を指しているのかを検討せねばならなかった。また、本文中で指摘したように、オーストラロイド、モンゴロイド、ドラヴィディアン、アーリヤンなどの人口系列に分けてみても、特に前 3 者の間には広範囲な混和・融合が生じており、その中で、宗教における習合現象や、言語・文化の複合が生じていたから、このような区分を過度に固定的に捉えることは慎まねばならない。

今後、このような大きな歴史的状況を踏まえたうえで、個々のカーストと諸部族、人類の三系統（ハプロ集団）との関連が考察されねばならない。

最後に、本稿の作業から、バラモン教化が完了したとされる時期に於いてさえも、ベンガルの辺境諸県の多くの人々の自己意識において、カーストが必ずしも究極の自己本質規定 identity ではなく、また、ヒンドゥ的社会秩序が必ずしも唯一の行動基準ではなかったであろうという見通しを述べることが許されるだろう。そして、この見通しは、ベンガルの周縁地域のみでなく、実はベンガル平野の中心部においても、多かれ少なかれ、妥当すると考えるべきである。アーリヤ的文化の影響が及ぶはるか以前から村人によって祀られてきた村の守り神 gramdevota が、今日なおベンガル全域の村々にほぼくまなく見出されることは、この主張の一つの根拠となろう。gramdevota の世界とナラカ王伝説は消滅することなく、ベンガル史を通じて脈打っており、時に民衆の反乱や社会運動という形をとって社会の表面に浮かび上がってくる。本稿で考察した先史時代から現代に至るベンガル史の部族的基盤が、このような運動に関与する人々の歴史意識、自己認識の一端を形作ってきたのではないかと思われる。

注

1) 正式なタイトルは、*Report of the Census of Bengal 1872*　By H. Beverley、Inspector-General of Registration, Bengal, Calcutta, Bengal Secretariat Press, 1872.
2) 谷口（2002 − 2005）は、ベンガル東部の 3 つの県（Dhaka、Bakarganj、Faridpur）について、このような作業を行っている。
3) 部族とは、ヒンドゥ文化とは異なる固有の文化を持つ社会集団であり、言語的にも非アーリヤ系の諸語を話す人々を指す。但し、実際には部族文化とヒンドゥ文化の境界はしばしば曖昧である。
4) たとえば、Singh, Surajit 1962、Singh, K. S. 1985、Singh, K.S.,1987 などがある。
5) Beteille, Andre 1975 が言及。語義からいえば、生まれにより形成される集団を意味する。また、中世に書かれた Chandi 女神の賛歌である Mukundram の *Kavikankana Chandi* にも、このようなジャーティの用法がある。[Eaton 1993：101]
6) この地図の行政区分は 1881 年センサス時のものであり、1872 年センサス時のそれと若干の相違が生じている。例えば、Cachar、Sylhet 両県はアッサム州に移管されたし、Jessore 県の一部が Khulna 県として分離している。また、Koch Bihar は藩王国であるために、1872 年センサス調査では省かれている。これらは、他の史料などによって、本稿の目的に沿って適宜調整した。
7) 各県の人口に大きな偏差があるので、その影響をコントロールするために、各県の県人口における各ジャーティの比率をとり、それについて変動係数を計算した。
8) Chatterjee,Gouripada 1976. 本書は、Midnapur 県の Bagdi 王国について研究した好著である。
9) Roy, Asim 1983、および、Haq, Muhammad Enamul 1975 の好著がある。また、谷口晉吉 , 2003: 24-29 も参照されたい。
10) 次の拙稿に基づく。Taniguchi, Shinkichi 2000.
11) 注 3 を参照。
12) 行政文書（主に銅板土地施与文書など）と民衆向け宗教歌謡（Mangal Kabya）、口承伝承などはバラモン的イデオロギーから相対的に自由であり、そこには当時の実際の状況が反映されている可能性があり、徐々に研究も進んでいる。だが、まだ明確にこのような問いに答えるには至っていない。
13) Basham は、このような状況を示唆していた。初版は 1954 年である。[Basham 1967]
14) Chattopadhyaya, Annapurna 2002-2006; Chatterji, Suniti Kumar 1974; Singh, G.P. 1990 などを参照.
15) Chattopadyaya, Annapurna 2002: 537-555.
16) Chatterji, S. 1974: 58-63.
17) 本稿では、gramdevota についての考察はできないが、Buchanan が恐らく最も早い記録の一つを残しており、最近になってもさまざまな視角からの研究がなされている。[Martin, Montgomery 1838: 422-479; Sarkar, R.M. 1986: 66-106; Roy, Suhita Sinha 2009: 209-252]
18) Chattopadhyaya, Annapurna 2002-2006:55-58,60,97-99,1057-82; Chatterji, S. 1974: 86-88; Choudhury, Pratap Chandra 1987 (3rd edtion):109-127; Sarma 1981:8-13.
19) 注 8 の拙稿に基づく。
20) Roy, Sarat Chandra 1912, 1970(reprint).
21) Munda は後述するように本来は村長を意味するから、部族集団の名称としては Kol あるいは Kolarian と呼ぶ方がより適切であるが、慣例として、この部族集団に属する人々を Munda と呼ぶ場合が多いので、本稿においても Munda を部族集団名としても用いる。
22) Chotanagpur 王家の成立については、ここに紹介した Sarat Chandra Roy 以外にも諸説がある。その代表的なものは、Dalton の議論 [Dalton, 1872: 165-169] であるが、これは、彼がこの王家から受け取った 19 世紀に書かれた家伝書（Nagabanshivali）に従った神話的なものであり、私は Sarat Chandra Roy 説の方が真実に近いと考える。[Sinha, Sudha 2001] は最新の研究であり、より詳しい。
23) ベンガル語文法構造にその痕跡（pronominalisation）が見い出される。

参考文献

Beteille, Andre 1975
Introduction to Bose, N.K., *The Structure of Hindu Society*, New Delhi, Orient Longman.

Beverley, H. 1872
Report of the Census of Bengal 1872, Calcutta, Bengal Secretariat Press.

Basham, A. L. 1967(2nd edition)
The Wonder that was India, Calcutta, Rupa & Co.

Buchanan, Hamilton 1830
General View of the History and Manners of Kamarupa, an unpublished manuscript delivered to the Indian Office library in 1830 (MSS. EUR. D98).

Chatterjee,Gouripada 1976
History of Bagree-Rajya (Garbeta), Delhi, Mittal Publications.

Chatterji, Suniti Kumar 1974
Kirata-Jana-Krti, Calcutta, The Asiatic Society.

Chattopadhyaya, Annapurna 2002-2006
The People and Culture of Bengal A Study in Origins, Vol.I (Part1) & (Part2), Vol.II (Part 1), Kolkata, Firma KLM.

Choudhury, Pratap Chandra 1987 (3rd edition)
The History of Civilization of the People of Assam to the twelfth century A.D., Guwahati, Spectrum Publications.

Dalton, Edward Tuite 1872
Descriptive Ethonology of Bengal, Calcutta, Office of the Superintendent of Government Printing.

Eaton, Richard M. 1993
The Rise of Islam and the Bengal Frontier, 1204-1760, Calfornia, the Regent of the University of Calfornia.

Haq, Muhammad Enamul 1975
A History of Sufi-ism in Bengal, Dacca, Asiatic society of Bangladesh.

The Indian Genome Variation Consortium 2005
"The Indian Genome Variation database (IGVdb): a project overview", *Hum Genet*
DOI 10.1007/s00439-005-0009-9.

Martin, Montgomery 1838
The History, Antiquities, Topography, and Statistics of Eastern India, Vol.III Puraniya, Ronggopoor, and Assam, London, Wm. H. Allen and Co.

Petralia, Michael D. & Allchin, Bridget (eds.) 2007
The Evolution and History of Human Populations in South Asia, Dordrecht, Springer.

Reich, David, et al. 2009
"Reconstructing Indian Population History," *Nature*, 461(7263): 489-494.

Risley, Herbert H. 1969
The People of India, Second edtion, Delhi, Munshiram Manoharlal.

Roy, Asim 1983
The Islamic Syncretistic Tradition in Bengal, Princeton, Princeton University Press.

Roy, Sarat Chandra 1912, 1970(reprint)
The Mundas and their Country, Bombay, Asia Publishing House.

Roy, Suhita Sinha 2009: 209-252
"Everyday Life and Formation of cultural Pattern in Peasant Society of Birbhum (1860-1940)", in Chittabrata Palit et al. (eds.), *Bengal Miscellany*, Vol.2, Kolkata,

B.R.Publishing Corporation.
Sarkar, R.M. 1985, 1986 (in India)
Regional Cults and Rural Traditions An Interacting Pattern of Divinity and Humanity in Rural Bengal, New Delhi, Inter-Indian Publications.
Sarma, Dimbeswar 1981
Kamarupasasanavali, Gauhati, Publication Board, Assam.
Singh, G.P. 1990
The Kirata in Ancient India, New Delhi, Gian Publishing House.
Singh, K.S. 1985
Tribal Society in India An Anthropological Perspective, New Delhi, Manohar.
Singh, K.S. 1987
"The Chotanagpur raj: Mythology, Structure and Ramification," *Tribal polities and state systems in pre-colonial eastern and northern India* edited by Surajit Sinha, Calcutta, K P Bagchi, 51-72.
Singh, Surajit 1962
"State formation and Rajput Myth in Tribal Central India", *Presidential Address, Section of Anthropology and Archaeology*, Forty-ninth Indian Science Congress, Cuttack.
Sinha, Sudha 2001
The Nagavanshis of Chotanagpur, New Delhi, Classical Publishing Company.
Taniguchi, Shinkichi 1977
Structure of Agrarian Society in Northern Bengal (1765 to 1800), unpublished Ph.D. dissertation submitted to University of Calcutta.
Taniguchi, Shinkichi 1994
"The Rajbangshi Community and the Changing Structure of Land tenure in the Koch Bihar Princely State," in Taniguchi,S., et al. (ed.) *Economic Changes and Social Transformation in Modern and Contemporary* South Asia, Tokyo, Hitotsubashi University, 57-92.
Taniguchi, Shinkichi 2000
"Regional Structure of Bengal Agrarian Societies in the late 19th Century," in Taniguchi, S.(ed.), *Development and Culture in Asia-Comparative Study on Grassroots Solidarity among Peoples in Asian Coutries*, Tokyo, Hitotsubashi University, 26-61.
Zerial, Tatiana, et al. 2006
"Y-choromosamal, insights into the genetic impact of the caste system in India," *Hum Genet*., 12(1), 137-144.
オッペンハイマー、スティーヴン、2007
仲村明子訳、『人類の足跡 10 万年前史』、草思社.
篠田謙一　2007
『日本人になった祖先たち』、NHK ブックス 1078、NHK 出版.
谷口晋吉　1995
「インド史における差別と融合―ベンガルとアッサムを中心として―」、『一橋論叢』114 巻 4 号、pp.649-665.
谷口晋吉　2002 年
「植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 (Ⅰ)」『一橋大学研究年報経済学研究』44, pp.47-102.
谷口晋吉　2003 年
「植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 (Ⅱ)」『一橋大学研究年報経済学研究』45, pp.3-106.
谷口晋吉　2004 年
「植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 (Ⅲ -1)」『一橋大学研究年報経済学研究』46, pp.47-150.

谷口晉吉　2005 年
「植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 (Ⅲ -2)」『一橋大学研究年報経済学研究』47，pp.83-146.

Tribe and Caste in Bengal: A historical Perspective

TANIGUCHI Shinkichi

This is an attempt at examining the historical relation between tribe and caste in Bengal. Usually, caste system is considered as the most important and fundamental social frame, at least, up to the advent of Muslim in India. However, the present author has had since long a serious doubt about this kind of understanding. The author's field of research locates in the frontiers of the Bengal plains and the majority of the population there belongs to a caste called the Rajbamsi. The Rajbamsi is a relatively new caste formed after the 16th century A.D., and the people there have a very vivid memory of their previous tribal name, the Koch. If we look at the social history of Bengal, we can easily pick up many cases of similar transformation of a tribe into a caste or castes. The full-fledged caste system was established in Bengal only in the thirteenth century. Therefore it is grotesque to think of Bengal society in terms of caste hierarchy for the period previous to that date. Then, what was the social foundation of Bengal before the thirteenth century? The natural answer to this will be the tribal systems. However, this identification remains only guesswork, unless we can provide sufficient evidence and reasoning to support this proposition. This paper exactly aims at this difficult task. The task is difficult, not only because of paucity of the historical evidence to prove it, but also the idea contradicts the conventional 'common sense.'